

卒業生紹介

ふろしき道 ～日本の心で世界を包む～

Junko Tsutsumi
つつみ 純子

風呂敷に魅せられて

「大江戸オリンピックは風呂敷でおもてなし!」。6年後の東京五輪に向けて、「風呂敷・和文化コンシェルジュ」のつつみさんは講演をいつもこう締めくくる。2011年に国際交流基金から派遣され、ポーランド、グルジア等で風呂敷のレクチャーとワークショップを開催した。その時の現地の高い評価に勇気付けられ「風呂敷は日本の文化や知恵が1枚の布に凝縮された素晴らしいツール」だと再認識した。

つつみさんが風呂敷に興味を抱くようになったのは今から6年前、偶然インターネットで見た画像がきっかけだった。「ワインボトルが風呂敷で包まれているのを見て、なんて可愛いのだろう」と思った。すぐに行動に移す性格のつつみさんは風呂敷屋に直行。日本で最大手の東京支店でギャラリーも併設されていた。その場で弟子入りを志願する。アシスタントとして採用され、頻繁に開かれるイベントを手伝いながら、風呂敷の柄や色、包み方をひとつひとつ覚えていった。「結び方や折り方を変えることで、運ぶ、まとう、隠すなどのさまざまな用途に1枚の布が見事に対応していくさまに驚きを隠せませんでした」。日本が誇る「暮らしに根差した美」を体現する風呂敷文化。のめりこんでいくのに時間はかからなかった。そんななか、リーマンショックが日本経済を直撃する…



風呂敷・和文化コンシェルジュ

1983年お茶の水女子大学家政学部家庭経営学科(現・生活科学部)卒。「日本の伝統文化を身近に再発見する」をキーワードに、風呂敷にとどまらず、「江戸しぐさ」「伝統食育」「しつらい」「年中行事」といったテーマで講座やワークショップを国内外で開いている。広島市出身。本名 太田(旧姓 樋口) 純子

風呂敷講師つつみ純子の和文化研究所

<http://www.furoshikible.com/>



焦らず、慌てず、諦めず

次々とイベントが没になり、つつみさんの仕事もなくなった。けれど、「風呂敷文化を伝えていきたい」という想いは消せない。友人の勧めでブログでの発信を始めることにした。講座開設の報せもフリーペーパーに載せてくれるという。肩書が必要になり、当時はまだ珍しかった「コンシェルジュ」を使って「風呂敷・和文化コンシェルジュ」と名乗ることにした。仕事の名前も本名の「太田」から「つつみ」に改名してスタート。しかし、コメントやメッセージはあっても仕事の依頼は皆無のまま時が過ぎる。1年と2日目、区の教育会館から講座の依頼が舞い込んだ。「嬉しかった! 15名余りの受講者に箱と瓶の包み方を教えました」。単発の仕事を幾つかこなすとまた仕事が途絶える日々。「くじけそうになると仕事がきました」。ブログは開設してから今まで1日も欠かさず更新し続けている。

転機は風呂敷に巡り会って3年目、国際交流基金の仕事だ。準備に数カ月を費やし、日本の歴史や文化を調べ研究した。帰国したつつみさんには新たなビジョンが生まれていた。「風呂敷文化はわかりやすく、ことばもいらぬ。世界の人々に風呂敷を通じて日本の文化とところを伝えたい」。そのためには、まず日本人が風呂敷のすばらしさを再認識することが大切だ。つつみさんはいま、日本各地を回って企業・団体・学校を中心に風呂敷文化の普及に努めている。

今こそ、「温故知新」!

教えること、伝えることは、お茶大卒業後に故郷広島で教職に就いた時から好きだった。いまも都内の高校で家庭科講師を務める。「両立の秘訣は、おもしろい部分を楽しむこと」。高校では食の勉強の課題に「駅弁甲子園」を考案し競わせ



る。和文化講座では、講話だけでなく江戸の町歩きも一緒に楽しむ。そんなつつみさんに最近気がかりなことがあるという。おせち料理を食べたことがない子、調理実習でアイロン台とまな板を間違えて運んでくる子どもがいる。「昔だったら当たりまえのことが日常の暮らしから遠ざかっていく」のが、家庭科という教科を通して皮膚感覚でわかる。つつみさんが、日本の伝統文化を身近に知るひとつとして、風呂敷文化を子どもたちに伝えていきたいと思うのは、こんな体験に危機感を抱くからでもある。

「グローバルな時代、世界に目を広げるのは素晴らしいけれど、その土台に自国のことを改めて見直す機会は大切。日本の伝統文化に触れることで、ゆとりと和らぎが生まれます」。

文責：坪田秀子
(学長特命補佐)

わたしのオフタイム

趣味は読書、サイクリング、テニスと幅広い。着物姿からは想像しにくいですがかなりのアウトドア派だ。休日はご主人の赴任先の東北温泉巡りとグルメ探訪。